

週刊

世界と日本

昭和47年4月10日創刊

発行所 ©内外ニュース
 東京都千代田区永田町2-17-17
 〒100-0014 電話 (03) 3580-1264(代)
 FAX (03) 3508-1070
 E-mail:tokyo@naigainews.jp
 URL:https://www.naigainews.jp/
 発行・編集人 相田 康夫
 月刊日(第1-3)発行
 購読料送料とも前納(16500円(消費税込))
 郵便振替口座 00190-7-54604

自我形成から自己確立へ

拓殖大学顧問 渡辺 利夫



I 自己と他者

私どもは、母親の胎内で生成し、この世に生まれてきます。私どもが初めて出会う他者が母です。他者であるとはいえず、きわめて密度の濃い共生的関係が母と子供の関係です。この母子の共生的関係から少し離れて存在するのが父親です。母親とならぶもう一つの共生的関係にある他者が父親です。そしてその周辺にこれもまた共生的な関係にある兄弟・姉妹さらには祖父母がいるはずですが、いままでもなく、これが家族です。この家族関係においては、自己と他者との関係は、それをみずからは選び取ることでできない、そういう意味で運命的なものです。私どもは、まずは家

族という共生的な他者の目の中に映る自己を確かめながら人生を出発させます。人生における最初の他者が家族です。家族という他者の目に映る自己が受容的であることを確認し、そして私どもは「肯定的な自我」を形成していくはずで、逆に、母子関係、父子関係、家族関係がスムーズにいかず、緊張をはらむものであったりすると、「否定的な自我」が形成され、その後の人生の過程で私どもはさまざまな心理的葛藤に悩まされることになりかねません。

幼児期、児童期を経て、少年・少女期、青年期に入っていくと、私どもは家族とは異なる他者との人間関係の中で生きていかざるを得ないのです。高校や大学を卒業していろいろな企業、団体などの組織の中で働くようになれば、そこで取り結ぶ人間関係は、一段と錯綜したものと なりましょう。そうした人間関係の中でも、私どもは他者の眼に自分はどう映っているかを確認しながら、人生の船を漕いでいかなければなりません。きわめて多様な他者の眼の中に投影される自己を確認しながら、自己の他者への対応を変化させ、自我を確かなものとして形成していくかなければならない。他者の眼に映る自分をつねに理性的に見据え、柔軟かつ自在に自己を変容させながら人生をこなやかに送るよう努めること、これが真に自

II 自己史を書く

人生とは経験の積みあげです。経験の文章化は、自分を再確認し、その後の自己を形成していくために欠かせないことのできない作業だと私は考えます。自己史を書く絶好の機会が私にはありました。私の東京工業大学の退職は平成12年でした。最終講義で何を話そうかと随分思いあぐねたことを思い出します。経済学者が経済学のことをしゃべってもさして興味をもつてくれない。そう予想して私は「センチメンタルジャーニー」私の中のアジア」と、ややくだりたタイトルのレクチャーをしました。通常はあまり語ることはない自分の、最後の機会なのだから一回くらいはみんなの前で話すの

III 経験と経験知

も悪くはないか、といった気分でした。その最終講義に雑誌Voiceの編集者の一人が聴講にきてくれていました。レクチャーが終わったところで彼は、先生、今日の話面白かったです。テープにとっておきましたので、それを原稿に起しますから、未入れしうちの雑誌に掲載させていただきます」といって、ケラに結構な量の未入力をして下さった。論文を掲載してくれました。最終講義が雑誌に掲載されることになって初めてのことです。その後、編集長から言われました。自己史を書くという場合、出生に始まり現在にいたる年表のようなものをつくり、少年時代、青年時代、壮年時代、現在と大きく三つ、四つの時期を区分して、その中で自分にとって重要であったものが限界かな」と思いながら人生に与えた経験の意味などを書いてみた

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2
田中首相、今こそ憲法の改正を	安倍首相は「アベノミクス」を	世界に広がる日本文化	2023年世界はこれから	習李平政権の対米競争	2023年日韓関係の展望	韓国企業をどう見るか	半導り素子の分析論	菅義偉平	近藤誠一	谷口智彦	百地章

はむしろ大変、充実した時間でした。何よりその後の人生で経験することと重なる時に、この時の経験ほど役に立ったものはないといつてもいいはずです。会社に入ったのは昭和38年、翌年が東京オリンピック、企業の時代でした。私が勤務したのは、東京赤羽の荒川沿いに立地する医薬品製造工場でした。資材倉庫課に配属され工場敷地内の各所への資材材の搬出入の事務を執り、傍らフォークリフトで化学薬品のドラム缶を主要部所に運び込むといったことも私の仕事でした。フォークリフトの運転免許が何より驚かされたのは、企業組織における人間関係でした。工場がコミュニティを形成し、人々が相互に強く結びついて一つの小宇宙を形成しているではありませんか。さまざまな経験を通じて自分自身の人生にどう活かすのか、文章化がどうしても必要です。経験の文章化を継続すること、これを自分のできるようにしてしまつたらどうでしょう。人間が人間として成長し、自己を確立するには、これがどうきない条件ではないかと私は考えます。

私どもは、母親の胎内で生成し、この世に生まれてきます。私どもが初めて出会う他者が母です。他者であるとはいえず、きわめて密度の濃い共生的関係が母と子供の関係です。この母子の共生的関係から少し離れて存在するのが父親です。母親とならぶもう一つの共生的関係にある他者が父親です。そしてその周辺にこれもまた共生的な関係にある兄弟・姉妹さらには祖父母がいるはずですが、いままでもなく、これが家族です。この家族関係においては、自己と他者との関係は、それをみずからは選び取ることでできない、そういう意味で運命的なものです。私どもは、まずは家